

協議会ニュース

No. **153**

2016. 12



Contents

02	自然観察サポーター養成講座①ネイチャーフィーリング研修会報告	事務局	石原 則義
03	“ユニバーサル”な自然観察を学ぼう その1、その2	名古屋支部	高松 一史
04	自然観察サポーター養成講座②	尾張支部	久米 未祐
04	日本の留歯類の分類と希少種カヤネズミの保全	知多支部	南川 陸夫
05	海辺での花しらべ	名古屋支部	横井 進
06	「山門水源の森」自然研修会	東三河支部	星野 芳彦
07	「マイマイのことをもっと知ろマイ!」石巻山日帰り研修を終えて	知多支部	牧野 靖子
08	初夏の木曾の自然をたずねて	西三河支	石黒 豊広
09	六所山の自然観察	東三河支	中西 正
10	世界のインタープリテーション	尾張支部	山口 昌宏
10	第8話最終回 ガラパゴスで植林に参加		
11	「水土保持の森みたけ」の森林整備		
12	名簿管理からのお知らせ/編集後記		

今号の表紙

木村 絢子（尾張支部）

シャシャンボ

“ユニバーサル”な自然観察を学ぼう。その1

事務局 石原 則義

日 時：8月20日（土）～21日（日）

場 所：庄内緑地グリーンプラザ

今年から県協議会主催で「あいち森と緑づくり環境活動推進事業」として「自然観察サポーター養成講座①」を実施。今回のテーマはネイチャ・フィーリングだが、会員に限らず誰でも参加できるように、キャッチフレーズは「“ユニバーサル”な自然観察を学ぼう」とした。

広報担当の石川さんには、素敵なチラシを作っていただいた。その効果もあってか申込期間に入るとさっそく10名の申込みがあった。この調子なら定員が埋まること間違いないと理事の方に連絡をした。しかし、その後パタッと申し込みが途絶えた。理事会で窮状を訴え理事の何人かに参加申込みを頂いた。また会員の皆様にも参加申込みを拡げていただいた。その甲斐あって、期間内に定員の30名が埋まった。

第1日目の午前中は、講座の時間に組み込まれていなかったが、もったいないので、その時間を県協議会で受け持つことにした。参加者の参加動機・期待することを事前にアンケートで聞き、参加者には当日、講師の方たちには前もってアンケート結果を送付した。

参加者の皆さんには、当日の服装と持ち物・参加費の支払い・会場までのアクセス・当日の緊急連絡先について案内をした。

初日の午前中、参加者を3班に分け、理事3人で司会をした。オープニングのワークショップで参加動機・期待することを聞き、参加者の動機・期待が共有できた。そ

の3班で午後の野外実習に臨んだので、楽しい雰囲気の中で自然観察を始めることができた。

アンケート＜参加の動機＞から

- ・自然観察サポーター養成講座であることが第1の動機です。自然観察指導員の講習を受けてから、特に指導員としての活動をしていません。踏み出すきっかけにしたいと思い参加することにしました。

アンケート＜期待すること＞から

- ・伝える観察会ではなく、共に感じる観察会とはどのようなものか、理論と実践を期待しています。

- ・五感を使った自然のガイドの方法を学びたいです。

参加者の感想から

- ・野外実習で五感を使って観察しました。触ることつまり目からの情報を遮断して指先や耳からの感覚をとぎすまして実施したことが印象に残りました。子どもたちにもこの2日間の感動体験を伝えられたらいいなと思いました。



▲野外観察の様子

“ユニバーサル”な自然観察を学ぼう その2

名古屋支部 高松 一史

8月20・21日に行なわれたネイチャ・フィーリング研修会に参加して感じたこと。指導員として、日々活動していて疑問がありました。誰のための自然観察会なのか？何のための自然観察会なのか？

この疑問に対しては「参加者に向けた発信」と答えるでしょう。では「参加者の嬉しさとは何ですか？」ともう一度原点に回帰し考える時間となりました。

生物を見て名前や生態を説明することで、自分自身が悦に入っていないのでしょうか？決められたコースを時間内に回る行動をしていないのでしょうか？そうではなく参加者と楽しさ・嬉しさ・感動を共有したいと感じました。

例えば、生物の名前です。学名「ジョロウグモ」＝「女郎蜘蛛」。でも子どもたちや若いお母さんは意味がわかりません。時代の変化で仕方がないと思います。言葉や文化は変化するのだから、みんなで今風の名前を考えるのも楽しいです。

観察とは、物事の実態を注意深く見ること。五感をフルに使って、ゆっくり、じっくり、しっかり、楽しく、見て、触れて、伝えあう。ただし、視覚や聴覚が不自由な方や車いすの方などには心配りが必要です。

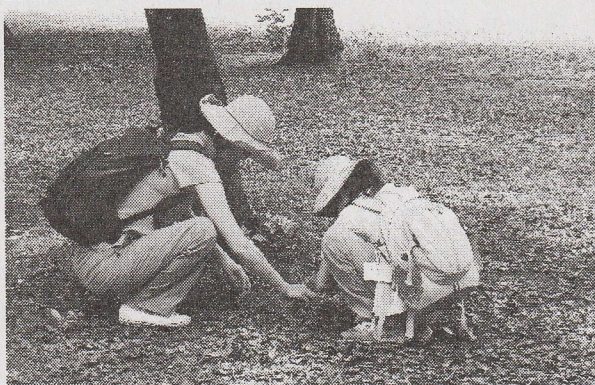
当日は目の不自由なお嬢さんも参加し、瀬川氏と小林氏が彼女を森に導いてくれました。落ち葉の地面を歩く様子が月面にもいる様に感じました。「きゃっきゃ」と言いながら楽しんでいました。

ユニバーサルとは、一般的であるさま、すべてに共通であるさま。

皆さんの観察会でも、ほんの少し観察方法に配慮することで参加者の感動や嬉しさが増え、伝えたい気持ちの花がたくさん咲かせられれば、自分も参加者も楽しい一日になることでしょう。

最後に、若いお父さんやお母さん、子どもたちに参加してもらえる自然観察会を作っていきたいと思います。そうすれば、指導員も若返り、自分自身も若返るでしょう。

これからの自然観察会とは、いつでも、どこでも、誰とでも、感動を分かち合おう!!
この瞬間にしか出来ないことをみんなで楽しもう!!



日本の齧歯類げっしの分類と希少種カヤネズミの保全

講師：全国カヤネズミネットワーク代表 畠 佐代子 氏



▲講師の畠 佐代子 氏

平成 28 年 10 月 10 日（月・祝）、日本特殊陶業市民会館において、畠佐代子氏をお招きし、「生物（哺乳類）分類・生態研修会～日本の齧歯類の分類と希少種カヤネズミの保全～」を開催しました。講演の主な内容は以下のとおりです。

1 齧歯類とは

齧歯類とはネズミ目の哺乳類の総称で、ネズミやリス、ビーバーやヤマアラシなどが該当します。哺乳類 4,000 種のうち 1,800～2,300 種を占めており、最も繁栄したグループと言えます。

南極大陸以外の大陸の森林、砂漠、草原などの多様な環境に適応しています。

特徴は「歯」。齧歯類の「齧」とは「かじ齧る」という意味で、上下一対の鋭い切歯（門歯）を持ち、一生伸び続けます。

2 日本の齧歯類

日本には、リス科、ヤマネ科、ネズミ科などがあります。ネズミ科の分類は過去にも変遷があり、今後 DNA の研究が進むと、さらに種分化する可能性もあります。例えばアカネズミは、昔は毛色や体格の違いにより別種と考えられていたものが同種で、地域による個体差がかなりあるということがわかりました。

カヤネズミも今は 1 属 1 種ですが中国で違う種が見つかったという報告もあります。

3 カヤネズミ

カヤネズミは日本最小のネズミで、大きさ（頭胴長）は親指大、重さは 500 円玉 1 枚分くらいです。植物の葉や茎に巻きつけて体を支える長い尻尾と、茎を掴みやすい足など、草上生活に適した体つきをしており、河川敷のカヤ原などで、オギやススキの葉を編んで巣を作ります。カヤネズミの住みやすい環境は、私たち人間によって脅かされており、愛知県のレッドデータブックでも絶滅危惧 II 類に分類されています。

4 カヤネズミとの共生

河川敷や堤防では、管理のために年 2 回草が刈られてしまいます。河川事務所の協力も得ながら調査を進め、一度に全て刈るのではなく、カヤネズミが避難できるような時期をずらして分けて刈ることや、カヤネズミの子育ての時期を避けることで、従来よりもカヤネズミが営巣しやすくなることがわかりました。

また、河川改修のための掘削工事では、オギなどの根が混じった土をとっておき、工事後にもとの場所に戻したところ、7 ヶ月後には元どおり草地となり営巣も確認することができました。この方法によりイネ科の外来種が広がったところもありますが、試験的に外来種を抜いてみると、オギが増え、カヤネズミの営巣も確認することができました。

こうした取り組みは、日本ユネスコ協会連盟の「未来遺産プロジェクト 2015」や京都市の「京都生きもの 100 選」などにも登録されています。（久米）

海辺での花しらべ

知多支部 南川陸夫

日 時：7月21日（木）9：30～11：30

場 所：常滑市蒲池海岸

天 気：晴れ

参加者：一般参加者12名、知多支部11名、
名古屋支部4名、尾張支部2名

知多支部では、日本自然保護協会の「自然しらべ2016」の調査項目である「海辺での花しらべ」を取り上げて、観察会を実施しました。海辺の花の季節は過ぎていましたが、この時期に咲く花を求めて開催しました。

蒲池海岸は、知多半島伊勢湾側のほぼ中央にあり、伊勢湾に注ぐ木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川に加え、庄内川、日光川、天白川が流れ込みます。観察場所は鬼崎漁港の北に位置し、北の大野漁港まで約1.8km続く砂浜海岸で、海岸植物の多い場所です。コウボウムギ、ハマヒルガオ、ハマゴウ、ハマボウフウの群落や、この地方には珍しいスナビキソウもあるため、5月には、遠く南から飛来するアサギマダラも見られます。



▲観察会風景

受付時に知多自然観察会が作成した「知多の海岸植物」のリーフレットを配布し、現地を知り尽くした今回のチーフ指導員の中井（三）会員から、注意事項や蒲池海岸の概要と現状について説明した後、観察会を実施しました。

夏の過酷な暑さや冬の強風で砂の移動が激しい砂浜でたくましく生育している海岸植物。私たちにとっては、防風や飛砂防止などの役に立っています。自然との共存が望まれます。



▲ハマゴウ

【観察した海岸植物のみ記入】

コウボウムギ（雌株・雄株）、コウボウシバ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ（開花）、ビロードテンツキ（開花）、オカヒジキ、スナビキソウ、ハマダイコン、ハマエンドウ、ケカモノハシ（開花）、ツルナ（開花）、ホコダカアカザ、マルハアカザ、トベラ、ダンチク

＜外来種＞コマツヨイグサ、オオフトバムグラ、アメリカネナシカズラ、アツバキミガヨラン、ウチハサボテン

「山門水源の森」 自然研修会

名古屋支部 横井 進

【日 時】2016年5月29日（日）

8:00~17:00

【場 所】滋賀県長浜市西浅井町

「山門（やまかど）水源の森」

【参加者】名古屋支部 18名、尾張支部 4名

今回の研修会は名古屋支部主催で開催されました。参加者は名神養老 SA に集合し、滋賀県と福井県の県境にある目的地に向かいました。

現地で「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」の方から、この森の成り立ち、湿原保全の大変さ、鹿害対策等の説明を聞きました。

最初に、湿原に咲く植物をまとめたビジターセンターの横のビオトープでピンクの花をつけたトキソウ、花が終わったミツガシワ、開花間近のサワラン、そしてモウセンゴケ等々、そして可愛いヒツジグサを観察しました。

そして森へ一歩踏み入れると一本一本の木に鹿対策のテープが巻かれ、ササユリも一本一本ネットで保護されていて、保全の対策が徹底され、その大変さが伝わりました。

次に私たちは健脚コース 5KM を選択し、高所にブナとミズナラ林、低所にアカマツやコナラ林、そこに熱帯性のアカガシ林が茂る様子対比出来る場所を目指しました。

全体にアカガシが大変たくさんあり、新緑の葉に太陽が当たりいろいろな色に輝いて、大変美しく見えました。アカガシの落ち葉が全山にあり、その上を滑らないよう

に用心して歩きました。ブナの大木とアカガシの大木を見上げるとその対比と光の違いもきれいにすることが出来ました。



▲見ごろのササユリ

また、コアジサイのブルーの花がさわやかに咲き、ヤマツツジのオレンジ、ハナヒリノキのスズランを横にしたような花、タンナサワフタギの花も満開、ギンリョウソウも顔を出し、イワナシ、シロモジ、サルトリイバラ等の実もたくさん見ました。

湿地は大変広い面積のようですが、柵に覆われて近づけず、湿地のミツガシワには時間の関係で出会えませんでした。

この地は日本海側と太平洋側の気候が変わるところで両方の植物が見られます。ヤブツバキとユキツバキの雑種である淡いピンクのユキバタツバキも見られ、その保護と研究がされているそうです。

時間が少し足りず、多様性のある植物をじっくりとは見られませんでした。多くの樹木、草花に出会えた楽しい研修観察会でした。

「マイマイのことをもっと知ろマイ!？」

石巻山日帰り研修を終えて

東三河支部 星野芳彦

去る5月29日(日)、次週に行われる本年度2回目の地域観察会(当支部では、4班編成の各班が企画・運営に当たる観察会をこう呼びます)の打合せも兼ね、マイマイ(陸棲の貝類、所謂カタツムリ)の研修会を実施しました。豊橋市自然史博物館、貝類担当の学芸員で理学博士の西浩孝さんが講師です。西さんはカタツムリ研究の若手スペシャリストで、昨年文一総合出版から「カタツムリハンドブック」を上梓しました。既に購入済みの方もいらっしゃるのでは。

参加者は、当支部20名、他支部1名の計21名でした。

9時半の集合後、登山道の途中にある石巻自然科学資料館で講義を聞き、その後登山道でマイマイ観察を行いました。

そもそもマイマイとは巻貝の中で陸棲のものを指し、肺を持っていてカタツムリやでんでんむしの別名で親しまれています。貝殻が退化したカタツムリがナメクジに相当し、マイマイとナメクジは合わせて陸貝とよばれます。

日本産の陸貝は約800種で、多くが固有種です。日本の鳥類が約600種であることを考えると、陸貝がいかに多様性にとんだ

動物であるかがわかります。さらにマイマイは、殻のふたの有無で2グループに分類できます。(左下写真参照)

そもそも石巻山はなぜマイマイの山なのでしょう。石巻山の山頂部は石灰岩でできていて、マイマイの殻を作るのに必要なカルシウムが豊富にあるため、種類や個体数が多いのです。特にこの山域にはオモイガケナマイマイ(下の写真参照)などの貴重種も生息しています。

当日までは晴天続きであまり多くのマイマイは見つけられませんでした。ガードレールに残されたマイマイの食痕(右写真)も発見できて観察の幅も広がりました。



▲ マイマイの食痕

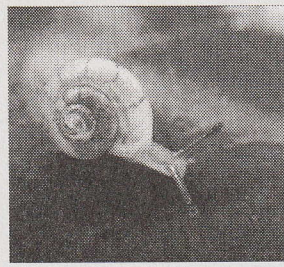
2時間余りで、オケマイ、オギセル、イマキコマガイ、イマキシロマイ、マルタラガイ、ベニコマカタシ、ヤマタニシ、他ナメマイなどを観察しました。豊橋周辺では、「メメコジョウ」という地方名があるそうで、知れば知るほどマイマイを「もっと見まい!」と言いたくなりました。



▲オモイガケナマイマイ(右)とベニコマオカタニシ(○内)



▲ヤマタニシ
ふた有



▲イマキシロマイ
ふた無

初夏の木曽の自然をたずねて

知多支部 牧野 靖子

【日 時】2016年6月4日(土)～5日(日)

【場 所】＜1日目＞城山史跡の森

＜2日目＞山本のハナノキ→飯田
美術博物館→猿庫の泉→大平宿

【参加者】15名

＜1日目＞

「城山史跡の森」は木曽福島にある森林。権現滝、児野山三角点、山城、福島城跡などを巡りながら植物を中心とした観察をしました。登り始めはモミやツガの森。ヒメコウゾの実、クサノオウ、オドリコソウ、エイザンスミレ、ナルコユリ、ラショウモンカズラ等。フタリシズカ、フタバアオイの花は見頃でした。また、カツラの大樹は幹回りを計測したところ、なんと5m越えの巨木もありました。昆虫は、ウスバシロチョウ、カワゲラ類などと遭遇。昼食は、木曽義仲が御嶽権現の出現を願い沐浴したと伝えられる「権現滝」でマイナスイオンを感じながら摂りました。1281mの児野山三角点までは、サワラの森林。下草は、ハシリドコロ、ハンショウズル、フユイチゴ、オシダなど。山頂付近では、御岳をはっきり見ることができました。



▲児野山付近から見た御岳

福島城跡は、本丸・二の丸・三の丸の跡として県の史跡指定を受けているようです。ここまででかなり時間オーバー、急いで下山。

＜2日目＞

飯田に向かい「山本のハナノキ」を雨の中見学。この木は、高さ約23m、枝の広がり東西22mで自生の木の中で最大といわれています。推定樹齢300年で長野県の天然記念物となっています。



▲山本のハナノキの前で記念撮影

本降りの雨ということで、飯田市美術博物館へ。飯田ゆかりの画家の作品や写真展示、自然系コレクションなどを鑑賞。

その後、名水百選、「猿庫の泉」にて名水を賞味。繭から羽化したてのガやヘビに出会いました。

最後は、大平宿へ。様々な営みを行っていた家々が残るこの古い宿場町は、現在廃村となっていますが、電気・水道が使用でき、宿泊できる江戸時代の建物群となっているようです。

今回も、盛り沢山の有意義な観察会研修旅行となりました。

六所山の自然観察

西三河支部 石黒豊広

日 時：6月19日（日）9：00～12：00

場 所：豊田市 六所山

参加者：一般16名 会員7名

六所山は古来より猿投山・本宮山と共に三河国三霊山のひとつとされていたそうです。徳川家の始祖松平太郎左衛門親氏が奥州より鹽竈（しおがま）六所明神を六所山に勧請し、松平氏・徳川氏の氏神として歴代当主の崇拝を受けたとあります。そんな由緒ある六所神社上宮社叢林は信仰により大事に守られてきているため、この付近では原生に近い森が垣間見られるはずです。

今日のテーマは「初夏の植物と梅雨時のキノコ」。コースは西駐車場から車道を下り、いのししコースを登って途中林道コースから西駐車場へ戻るルートとし、観察会の始まりです。

車道から：道路で切り開かれた空間は良く光が差し込むため、ところどころに花が見られます。目立つのは土手面のあちらこちらに咲く淡いピンクの美しいササユリです。また良く見ると白い小さな花ネズミモチです。ムラサキシキブも咲き始めたようです。目を凝らすとヒメコウゾも地味な花を咲かせています。ツクバネウツギのガクが2枚3枚4枚？5枚がない…花は終わっているけどこれってコツクバネウツギ？？？でしょう。標高が高いのかクリの長い雄花がまだ見られます。地面に目を向けるとドクダミやオカトラノオの白い花、ノアザミの赤が目立ちます。林内の日陰では背の高いムラサキニガナが花を咲かせようとしていま

す。ウグイスやセンダイムシクイ、ホトトギスのさえずりも良く聞かれます。湿った明るい道端にはミゾカクシの花と、いろいろな自然環境が楽しめました。

いのししコース：常緑樹を主体とした巨木の森で、暗い林床となっています。サンコウチョウやオオルリのさえずりが頭上から降る暗い森の中ではヤマアジサイの花が白く浮き立つように見えます。足元を注意深く見渡すとクモキリソウ、ツチアケビ、オオバノトンボソウ、ヒメウワバミソウ、ナベワリなどの花、ダイダイガサ、ツエタケなどのきのこが目に入ってきました。シダの仲間も多く、見て回るのが大変です。足元に気を付けながら登ってゆくと先の方で声がします。「イヌブナだよー」という声に一同見上げて、樹形や葉の様子を確認しています。アカガシなどの常緑樹を確認しながら登ってゆくと、いのししコースとも別れ林道コースへの分岐です。

林道コース：ヤマアジサイ、マタタビの花と白い葉、イワガラミの花が咲き年のようで、スギに白い花が咲いたようで見事です。ニオイコベニタケ、ツギハギハツなどのキノコやウリノキやフユザンショウを観察しながら進むとニワトコのような見慣れない草、ソクズのような梅雨空の下でしたが雨も何とか持ちこたえ、時間どおり西駐車場に戻ることが出来ました。サンショウとフユザンショウの実をついばんでは「辛〜い！」とサンショウクイと共にヒリリ泣きながら楽しんだ六所山社叢林の観察会でした。

この植林作業は、減少した原生林（スカレシアの森）を復元したいという藤原幸一さんの思いから出発しており、それにピースボートが協賛している形だろう。植林が長続きするためには、部外者が植えるだけではだめで、島に住む人が気づき自ら植え始めなければならないということで、今回の植樹は島の高校生と一緒にいった。植樹の苗は我々参加者が寄付する形で、一人5000円が費用に組み込まれていた。また、植林した木にプレートが置かれるということで、プレート代を1000円寄付した。

保護されているはずのガラパゴスでも利用が認められている場所があり、そこには多くの外来種が入っているという。それらが原生地域にも侵入していることが問題になっている。また、開発した場所を自然に戻す試みもされている。今回の植林の一つは国立公園の中の自然復元地だった。そのような場所でも通常、人は立ち入ることはできないが、今回のプロジェクトのために特別に入ることができた。現場は道路から200mほどの場所で、そこへは岩が所々に出ており、ぬかるんでいた。

苗は30~40cmのポット苗として用意されていた。かつてはこれほどよい状態の苗はできていなかったという。公園関係者が現場まで運んでくれた。高校生10名と先生、公園関係者5名、我々27名とツアーリーダー、ガイド5名が揃ったところで、紹介とあいさつが行われた。植林に先立ち、その植え方や植林の意義が説明された。スカレシアは植林後2年で5mほどに育つので、外来の木イチゴ（ブラックベリー）、ウイロカブレラ、アカキナノキは刈られ、その場所に穴が掘られていた。高校生と我々が3人グループをつくり一緒に植える。こ

こで持ってきたプレートを設置した。天候は朝から不順で、ついに雨が降り出したが、どうにか用意した苗の植林はできた。

エルチャトは、野生のゾウガメがみられる数少ない場所である。ここは国立公園に接した民間の地で、一時農地だった場所を放棄したところである。第二の植林地はこのゾウガメが棲む場所のはずれにあった。やはり高校生と組んでの植林で、穴もすでに掘られていた。草地だった場所を草刈りして穴を掘っただけなので、土をかぶせるため周りを崩すのが結構大変だった。ここではスカレシアにマタサルノというマメ科植物が加えられていた。隣接して2年前にピースボートが植林した場所があった。

昼食後移動した第3の植林地は小さな集落の中にあり、農園の一部になっていた。すぐ横はバナナ園、土はこまやかで黒く、まさしく農園である。ただ掘られた穴は深くはなく、土をかぶせるのもたやすくはなかった。また以前に植林した場所に接していたが、それらの生長がいいわけではない。植えた後の管理はどうなっているのか、それらのきめ細やかさが足りないのかもしれない。最後にピースボートからということで学校と国立公園に1,000ドルずつ寄付された。



▲高校生と一緒に植林作業

「水土保持の森みたけ」の森林整備

尾張支部 山口 昌宏

平成 17 年岐阜県白川村の「トヨタ自然学校」を会場にした「自然観察指導員講習」を受講して指導員となり、尾張支部の観察会に参加するようになった。

その後、所属する企業が「社会貢献活動」として、里山を整備することを始め、岐阜県御嵩町で社員と一般の方々と共に 8 年ほど前から続けている。

道づくり、除間伐、きのこ作り、山菜採取、薪づくり、山仕事体験などを通じて社員の関心を自然へ向け、同時に森林整備に貢献する活動である。



▲除間伐材を薪にする

以来、毎月 1～2 回の活動が続け、現在は「湿地の復元」に取り組んでいる。

この湿地は長年放置されてミヤマウメドキ、イヌツゲ、ソヨゴなどの樹林化が進み、地表面には落葉や土砂が溜まり太陽光が当たらない。それらを伐開除去するため、不安定な足元やミヤコイバラに悩まされながら汗を流している。同時に自然観察会の仲間にお願ひして現状の植生調査を実施していただいた。



▲湿地での植生調査の様子

現場近くに中山道がある。時々リックサックを担いだ旅人が石畳を踏んで通り過ぎる。近隣には古い民家を借りて名古屋方面から週末に集まり、自然農業や竹炭焼き、食事会などを楽しむグループ「なごやか和の国 うとう坂」が居たりして、ゆったりのんびり楽しめるエリアでもある。



▲他グループとの楽しいひと時

* * * 名簿管理からのお知らせ * * *

本年度4月1日以降の入会者は0名、退会者は45名で、現在の在籍者数は342名です。新人の育成、入会促進が喫緊の課題です。(森田)

◆協議会在籍者数(10月5日現在)

所属支部	人数	備考
名古屋支部	95名	家族会員(5)
尾張支部	88名	
知多支部	63名	家族会員(4)
西三河支部	45名	
東三河支部	47名	家族会員(2)
奥三河支部	4名	
協議会所属	0名	
合計	342名	家族会員(11)

* * * 編集担当からのお知らせ * * *

東三河支部中西会員による連載「海外のインタープリテーション」は、今号でおしまいです。2012年、地球一周の旅で出会った様々な自然と、それを紹介するオプションルツアーの人々。「インタープリテーション」と一言と言っても、自然と向き合う姿勢やお国柄など、千差万別であることがよく分かりました。

計8回の連載、毎回楽しく読ませていただきました。本当にありがとうございました。

＜編集後記＞

多少過ごしやすい気温になったかと思えば、あっという間に真冬の寒さが到来し、私の家の近所では、紅葉を見る間もなく桜の葉が散ってしまいました。桜は、その花の美しさはもちろんのこと、黄色やオレンジ、赤色など、複雑に色づく紅葉も美しく、毎年楽しみにしているだけに、少し残念な気持ちです。サクサクの落ち葉ふみに期待したいと思います。(久米)

編集スタッフ	岡田雅子 久米未祐 馬場隆之 日浦誠章
「協議会ニュース」	久米未祐 TEL: 090-3302-1621
編集部	E-mail: ni.saboten@gmail.com

愛知県自然観察指導員連絡協議会(あいち自然観察会)事務局 石原則義
〒464-0096 名古屋市千種区下方町7-3 TEL/FAX: 052-711-3087
E-mail: noriyoshibob@yahoo.co.jp Web Page: http://naichi.net
郵便振替口座: 00820-9-6546 (名義: 愛知県自然観察指導員連絡協議会)

愛知県自然観察指導員連絡協議会(あいち自然観察会)機関誌「協議会ニュース」153号 平成28年12月発行